「共通テスト」を受験する人対象の対策講座です。第1・2回試行調査とオリジナル予想問題を実施します。

「共通テスト」は、それまでのセンター試験よりも「知識・技能や思考力、判断力を問う」とされ、複数の資料を読み比べたり、生徒同士や教師と生徒たちとの会話文を素材としての問題が出題されたりします。

それらの問題も本講座で扱いますので、しっかり取り組んでいきましょう。

とは言え、古文や漢文を正しく読解するために必要な学力は、どの大学だろうが、過去のセンター試験だろうが、共通テストでも変わらず同じです。

古文であれば、「重要単語」と「古文文法」などの読解のための土台や、「基本的な読解ルール」や「古文常識」を理解できていなければ読めません。漢文であれば、「語順」や「置き字」などの土台と「重要句法」、重要単語や頻出の「読み」などをおさえる必要があります。

本講座では、これらは既に理解できているものとして授業を行いますので、それらが未学習の場合は、先に『古文文法編』（学年問わず・ベーシック講座でも可）や『スタンダード古文読解』、『漢文』（学年問わず・ベーシック講座でも可）などの講座を受講してから、本講座を受講してください。

それでは、共通テストで古典が得点源になるように一緒に頑張っていきましょう！

岡本　梨奈

予復習・授業の受け方について

各講の動画を見る前に、必ず該当の講の予習を（辞書など使わず自力で）してください。
制限時間は各大問二十分を目安に実施をしてください。
ただし、自身の戦略が既に立っている人は、自分の時間配分を目安に実施しましょう。
また、万一、目標時間内に解けなかった場合は、そのまま最後まで納得いくまで解ききってください。そして、現状何分かかったのかを確認すること。どれくらいオーバーしてしまったのかを把握して、目標時間内に解ききるためにはあと何分縮めなければいけないのか意識してください。
予習が終わったら、なるべく時間をあけずに該当講座の動画を見てください。
講義を見終えたら、復習を必ずしましょう。間違えた問題があれば、何が原因で間違えたのかを各自で分析して、そこを潰していきましょう。ちなみに、目標時間内に解けない人の原因の多くは、「単語」の意味や「文法」が出てくるのに時間がかかりすぎなことが挙げられます。「理解はできているけれど、出てくるのが遅い」という状態だと、やはり時間がかかってしまいます。秒速で出てくるくらいに何度も反復復習をしましょう。
それらができているのに時間がかかる場合は、選択肢を横に読み比べるスピードや、要領の良い解き方ができているかどうかなど、様々な原因が考えられますので、どこで手間取ってしまったのかをご自身で分析してください。
あと、復習の際に再度選択肢を見て、間違い選択肢の「どこが間違いなのか」がわかるかどうか、どういうひっかけにしているかなども意識して分析してみてもよいでしょう。
本講座をすべて受講した後は、共通テスト用の演習問題をどんどん実施してください。
従前のセンター過去問も良い演習になりますので、本試も追試も手に入る分は是非チャレンジしましょう。

目次

古文

第１講 ２０１７年度 試行調査 第４問（古文）……p 1
第２講 ２０１８年度 試行調査 第４問（古文）……p 13
第３講 演習問題（古文）……p 23

漢文

第４講 ２０１７年度 試行調査 第５問（漢文）……p 33
第５講 ２０１８年度 試行調査 第５問（漢文）……p 43
第６講 演習問題（漢文）……p 53

第１講　２０１７年度 試行調査 第４問（古文）

第４問

『源氏物語』は書き写す人の考え方によって本文に違いが生じ、その結果、本によって表現が異なっている。次の【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】は、ともに『源氏物語』（桐壺の巻）の一節で、最愛の后である桐壺の更衣を失った帝のもとに、更衣の母から故人の形見の品々が届けられた場面である。【文章Ⅰ】は藤原定家が整えた本文に基づき、【文章Ⅱ】は源光行・親行親子が整えた本文に基づいている。また、【文章Ⅲ】は源親行によって書かれた『原中最秘抄』の一節で、【文章Ⅱ】のように本文を整えたときの逸話を記している。【文章Ⅰ】～【文章Ⅲ】を読んで、後の問い（問１～６）に答えよ。

【文章Ⅰ】

かの贈りもの御覧ぜさす。亡き人の（注1）住みか尋ねいでたりけむ、(ア)しるしの釵ならましかば、と思ほすも、いとかひなし。

(イ)尋ねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく

（注2）絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師と言へども、筆限りありければ、いと匂ひ少なし。（注3）太液の芙蓉、未央の柳も、げに通ひたりし容貌を、唐めいたるよそひはうるはし

メモ欄

うこそありけめ、なつかしうらうたげなりしを思し出づるに、花鳥の色にも音にも、よそふべきかたぞなき。

【文章Ⅱ】

かの贈りもの御覧ぜさす。亡き人の住みか尋ねいでたりけむ、しるしの釵ならましかば、と思すも、いとかなし。

　尋ねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく

絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師と言へども、筆限りありければ、いと匂ひ少なし。太液の芙蓉も、げに通ひたりし容貌・色あひ、唐めいたりけむよそひはうるはしう、けうらにこそはありけめ、なつかしうらうたげなりしありさまは、女郎花の風になびきたるよりもなよび、撫子の露に濡れたるよりもらうたく、なつかしかりし容貌・気配を思し出づるに、花鳥の色にも音にも、よそふべきかたぞなき。

メモ欄

（注）
1　亡き人の住みか尋ねいでたりけむ、しるしの釵――唐の玄宗皇帝と楊貴妃の愛の悲劇を描いた漢詩「長恨歌」による表現。玄宗皇帝は、最愛の后であった楊貴妃の死後、彼女の魂のありかを求めるように道士（幻術士）に命じ、道士は楊貴妃に会った証拠に金の釵を持ち帰った。
2　絵――更衣の死後、帝が明けても暮れても見ていた「長恨歌」の絵のこと。
3　太液の芙蓉、未央の柳――太液という池に咲いている蓮（はす）の花と、未央という宮殿に植えられている柳のことで、いずれも美人の形容として用いられている（「長恨歌」）。

【文章Ⅲ】

亡父光行、昔、五条三品（注1）にこの物語の不審の条々を尋ね申し侍り（はべ）し中に、当巻に、「絵に描ける楊貴妃の形は、いみじき絵師と言へども、筆限りあれば、匂ひ少なし。太液の芙蓉、未央の柳も」と書きて、「未央の柳」といふ一句を見せ消ち（注2）（け）にせり。これによりて親行を使ひとして、「楊貴妃をば芙蓉と柳とにたとへ、更衣をば女郎花と撫子にたとふ、みな二句づつにてよく聞こえ侍るを、御本（注3）、未央の柳を消たれたるは、いかなる子細の侍るやらむ」と申したりしかば、
「我は(ウ)いかでか自由の事をばしるべき。行成卿（注4）（きやう）の自筆の本に、この一句を見せ消

メモ欄

ちにし給ひき。紫式部同時の人に侍れば、申し合はする様こそ侍らめ、とてこれも墨を付けては侍れども、いぶかしさにあまたたび見しほどに、若菜(注5)の巻にて心をえて、おもしろくみなし侍るなり」

と申されけるを、親行、このよしを語るに、

「若菜の巻には、いづくに同類侍るとか申されし」

と言ふに、

「それまでは尋ね申さず」

と答へ侍りしを、さまざま恥(は)ぢしめ勘当し侍りしほどに、親行こもり居て、若菜の巻を数遍ひらきみるに、その意をえたり。六条院(注6)の女試楽(しがく)、女三の宮、人よりちいさくうつくしげにて、ただ御衣のみある心地す、にほひやかなるかたはをくれて、いとあてやかになまめかしくて、二月の中の十日ばかりの青柳のしだりはじめたらむ心地して、とあり。柳を人の顔にたとへたる事あまたになるによりて、(エ)<u>見せ消ちにせられ侍りしにこそ</u>。三品の和才すぐれたる中にこの物語の奥義をさへきはめられ侍りける、

メモ欄

ありがたき事なり。しかあるを、京極中納言入道(注7)の家の本に「未央の柳」と書かれたる事も侍るにや。又俊成卿(注8)の女（むすめ）に尋ね申し侍りしかば、

「この事は伝々の書写のあやまりに書き入るるにや、あまりに対句めかしくにくいけしたる方侍るにや」

と云々（しかじか）。よりて愚本にこれを用いず。

（注）
1　五条三品 —— 藤原俊成。平安時代末期の歌人で古典学者。
2　見せ消ち —— 写本などで文字を訂正する際、もとの文字が読めるように、傍点を付けたり、その字の上に線を引くなどすること。
3　御本 —— 藤原俊成が所持する『源氏物語』の写本。
4　行成卿 —— 藤原行成。平安時代中期の公卿で文人。書道にすぐれ古典の書写をよくした。
5　若菜の巻 ——『源氏物語』の巻名。
6　六条院の女試楽 —— 光源氏が邸宅六条院で開催した女性たちによる演奏会。
7　京極中納言入道 —— 藤原定家。藤原俊成の息子で歌人・古典学者。
8　俊成卿の女 —— 藤原俊成の養女で歌人。

メモ欄

問１　傍線部(ア)「しるしの釵ならましかば」とあるが、直後に補うことのできる表現として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［１］。

①　いかにうれしからまし
②　いかにめやすからまし
③　いかにくやしからまし
④　いかにをかしからまし
⑤　いかにあぢきなからまし

問2　傍線部(イ)「尋ねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく」の歌の説明として**適当でないもの**を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［２］。

① 縁語・掛詞は用いられていない。
② 倒置法が用いられている。
③ 「もがな」は願望を表している。
④ 幻術士になって更衣に会いに行きたいと詠んだ歌である。
⑤ 「長恨歌」の玄宗皇帝を想起して詠んだ歌である。

問3 傍線部(ウ)「いかでか自由の事をばしるべき」の解釈として最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **3** 。

① 勝手なことなどするわけがない。
② 質問されてもわからない。
③ なんとかして好きなようにしたい。
④ あなたの意見が聞きたい。
⑤ 自分の意見を言うことはできない。

問４　傍線部(エ)「見せ消ちにせられ侍りしにこそ」についての説明として最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［４］。

① 紫式部を主語とする文である。
② 行成への敬意が示されている。
③ 親行の不満が文末の省略にこめられている。
④ 光行を読み手として意識している。
⑤ 俊成に対する敬語が用いられている。

問５ **【文章Ⅱ】**の二重傍線部「唐めいたりけむ〜思し出づるに」では、楊貴妃と更衣のことが、**【文章Ⅰ】**よりも詳しく描かれている。この部分の表現とその効果についての説明として、**適当でないもの**を、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。解答番号は　5　。

① 「唐めいたりけむ」の「けむ」は、「長恨歌」中の人物であった楊貴妃と、更衣との対比を明確にしている。

② 「けうらにこそはありけめ」という表現は、中国的な美人であった楊貴妃のイメージを鮮明にしている。

③ 「女郎花」が風になびいているという表現は、更衣が幸薄く薄命な女性であったことを暗示している。

④ 「撫子」が露に濡れているという表現は、若くして亡くなってしまった更衣の可憐（かれん）さを引き立てている。

⑤ 「○○よりも△△」という表現の繰り返しは、自然物になぞらえきれない更衣の魅力を強調している。

問６　【文章Ⅲ】の内容についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［６］。

① 親行は、女郎花と撫子が秋の景物であるのに対して、柳は春の景物であり、桐壺の巻の場面である秋の季節に使う表現としてはふさわしくないと判断した。そこで、【文章Ⅱ】では「未央の柳」を削除した。

② 俊成の女は、「未央の柳」は紫式部の表現意図を無視した後代の書き込みであると主張した。そして、俊成から譲られた行成自筆本の該当部分を墨で塗りつぶし、それを親行に見せた。

③ 光行は、俊成所持の『源氏物語』では、「未央の柳」が見せ消ちになっていることに不審を抱いて、親行に命じて質問させた。それは、光行は、整った対句になっているほうがよいと考えたからであった。

④ 親行は、「未央の柳」を見せ消ちとした理由を俊成に尋ねたところ、満足な答えが得られず、光行からも若菜の巻を読むように叱られた。そこで、自身で若菜の巻を読み、「未央の柳」を不要だと判断した。

⑤ 俊成は、光行・親行父子に対しては、「未央の柳」は見せ消ちでよいと言っておきながら、息子の定家には「未央の柳」をはっきり残すように指示していた。それは、奥義を自家の秘伝とするための偽装であった。

第２講　２０１８年度 試行調査 第４問（古文）

第４問　次の文章は『源氏物語』「手習（てならい）」巻の一節である。浮舟（うきふね）という女君は、薫（かおる）という男君の思い人だったが、匂宮（におうのみや）という男君から強引に言い寄られて深い関係になった。浮舟は苦悩の末に入水（じゅすい）しようとしたが果たせず、僧侶たちによって助けられ、比叡山（ひえいざん）のふもとの小野（おの）の地で暮らしている。本文は、浮舟が出家を考えつつ、過去を回想している場面から始まる。これを読んで、後の問い（**問１～５**）に答えよ。（配点　50）

あさましうもてそこなひたる身を思ひもてゆけば、宮（注１）を、すこしもあはれと思ひ聞こえけむ心ぞいとけしからぬ、ただ、この人の御ゆかりにさすらへぬるぞと思へば、小島（こじま）（注２）の色を例（ためし）に契り給（たま）ひしを、などてをかしと思ひ聞こえけむとこよなく飽きにたる心地す。はじめより、薄き（注３）ながらものどやかにものし給ひし人は、この折（をり）かの折など、思ひ出（い）づるぞこよなかりける。かくてこそありけれと聞きつけられ奉らむ恥づかしさは、人よりまさりぬべし。さすがに、この世には、ありし御さまを、よそながらだに、いつかは見むずるとうち思ふ、なほわろの心や、かくだに思はじ、など A 心ひとつをか

メモ欄

へさふ。

からうして鶏(とり)の鳴くを聞きて、いとうれし。母の御声を聞きたらむは、ましていかならむと思ひ明かして、心地もいとあし。供(注4)にてわたるべき人もとみに来ねば、なほ臥(ふ)し給へるに、いびき(注5)の人はいととく起きて、粥(かゆ)などむつかしきことどもをもてはやして、「御前(おまへ)に、とく(ア)聞こし召せ」など寄り来て言へど、まかなひもいと心づきなく、うたて見知らぬ心地して、「なやましくなむ」と、ことなしび給ふを、強(し)ひて言ふもいと(イ)こちなし。下衆(げす)下衆しき法師ばらなどあまた来て、「僧都(そうづ)(注6)、今日下(お)りさせ給ふべし」、「などにはかには」と問ふなれば、「一品(いっぽん)の宮の御物(もの)の怪(け)になやませ給ひける、山の座(ざ)主(す)御修法(ずほふ)仕(つか)まつらせ給へど、なほ僧都参り給はでは験(しるし)なしとて、昨日二たびなむ召し侍(はべ)りし。右大臣殿の四位少将、昨夜(よべ)夜更(ふ)けてなむ登りおはしまして、后(きさい)の宮の御文など侍りければ下りさせ給ふなり」など、いとはなやかに言ひなす。恥づかしうとも、あひて、尼になし給ひてよと言はむ、(ウ)さかしら人すくなくてよき折にこそと思へば、起きて、「心地のいとあしうのみ侍るを、僧都の下りさせ給へらむに、忌(い)(注7)むこと受け侍

メモ欄

らむとなむ思ひ侍るを、さやうに聞こえ給へ」と語らひ給へば、ほけほけしううなづく。例(注8)の方におはして、髪は尼君(注9)のみ梳(けづ)り給ふを、別人(ことひと)に手触れさせむもうたておぼゆるに、手づから、はた、えせぬことなれば、ただすこしとき下(くだ)して、B親にいま一たびかうながらのさまを見えずなりなむこそ、人やりならずいと悲しけれ。いたうわづらひしけにや、髪もすこし落ち細りにたる心地すれど、何ばかりもおとろへず、いと多くて、六尺(注10)ばかりなる末などぞうつくしかりける。筋なども、いとこまかにうつくしげなり。「かかれとてしも」と独りごちゐ給へり。

（注）
1 宮 —— 匂宮。
2 小島の色を例に契り給ひし —— 匂宮に連れ出されて宇治川(うじがわ)のほとりの小屋で二人きりで過ごしたこと。
3 薄きながらものどやかにものし給ひし人 —— 薫のこと。
4 供にてわたるべき人 —— 浮舟の世話をしている女童(めのわらわ)。
5 いびきの人 —— 浮舟が身を寄せている小野の庵(いおり)に住む、年老いた尼。いびきがひどい。
6 僧都 —— 浮舟を助けた比叡山の僧侶。「いびきの人」の子。
7 忌むこと受け侍らむ —— 仏教の戒律を授けてもらいたいということ。
8 例の方 —— 浮舟がふだん過ごしている部屋。
9 尼君 —— 僧都の妹。
10 六尺 —— 約一八〇センチメートル。

メモ欄

問１　傍線部Ａ「心ひとつをかへさふ」とあるが、ここでの浮舟の心情の説明として最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。
解答番号は［１］。

①　匂宮に対して薄情だった自分を責めるとともに、現在の境遇も匂宮との縁があってこそだと感慨にふけっている。
②　匂宮と二人で過ごしたときのことを回想して、不思議なほどに匂宮への愛情を覚え満ち足りた気分になっている。
③　薫は普段は淡々とした人柄であるものの、時には匂宮以上に情熱的に愛情を注いでくれたことを忘れかねている。
④　小野でこのように生活していると薫に知られたときの気持ちは、誰にもまして恥ずかしいだろうと想像している。
⑤　薫の姿を遠くから見ることすら諦めようとする自分を否定し、薫との再会を期待して気持ちを奮い立たせている。

問２ 傍線部(ア)〜(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①〜⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 2 〜 4 。

(ア) 聞こし召せ 2
① お起きなさい
② 着替えなさい
③ お食べなさい
④ 手伝いなさい
⑤ お聞きなさい

(イ) こちなし 3
① 気が利かない
② 大げさである
③ 優しくない
④ 気詰まりだ
⑤ つまらない

(ウ) さかしら人 4
① 知ったかぶりをする人
② 口出しする人
③ 身分の高い人
④ あつかましい人
⑤ 意地の悪い人

問３　この文章の登場人物についての説明として**適当でないもの**を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［５］。

① 浮舟は、朝になっても気分が悪く臥せっており、「いびきの人」たちの給仕で食事をする気にもなれなかった。

② 「下衆下衆しき法師ばら」は、「僧都」が高貴な人々からの信頼が厚い僧侶であることを、誇らしげに言い立てていた。

③ 「僧都」は、「一品の宮」のための祈禱(きとう)を延暦寺の座主に任せて、浮舟の出家のために急遽(きゅうきょ)下山することになった。

④ 「右大臣殿の四位少将」は、「僧都」を比叡山から呼び戻すために、「后の宮」の手紙を携えて「僧都」のもとを訪れた。

⑤ 「いびきの人」は、浮舟から「僧都」を呼んでほしいと言われても、ぼんやりした顔でただうなずくだけだった。

問４ 傍線部Ｂ「親にいま一たびかうながらのさまを見えずなりなむこそ、人やりならずいと悲しけれ」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6 。

① 「かうながらのさま」とは、すっかり容貌の衰えた今の浮舟の姿のことである。

② 「見えずなりなむ」は、「見られないように姿を隠したい」という意味である。

③ 「こそ」による係り結びは、実の親ではなく、他人である尼君の世話を受けざるを得ない浮舟の苦境を強調している。

④ 「人やりならず」には、他人を責める浮舟の気持ちが込められている。

⑤ 「『……悲しけれ』と思ひ給ふ」ではなく「悲しけれ」と結ぶ表現には、浮舟の心情を読者に強く訴えかける効果がある。

問5　次に掲げるのは、二重傍線部「かかれとてしも」に関して、生徒と教師が交わした授業中の会話である。会話中にあらわれる遍昭（へんじょう）の和歌や、それを踏まえる二重傍線部「かかれとてしも」の解釈として、会話の後に六人の生徒から出された発言①〜⑥のうち、適当なものを二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は［7］・［8］。

生徒　先生、この「かかれとてしも」という部分なんですけど、現代語に訳しただけでは意味が分からないんです。どう考えたらいいですか。

教師　それは、

　たらちねはかかれとてしもむばたまの我（わ）が黒髪をなでずやありけむ

という遍昭の歌に基づく表現だから、この歌を知らないと分かりにくかっただろうね。古文には「引き歌」といって、有名な和歌の一部を引用して、人物の心情を豊かに表現する技法があるんだよ。

生徒　そんな技法があるなんて知りませんでした。和歌についての知識が必要なんですね。

教師　遍昭の歌が詠まれた経緯については、『遍昭集』という歌集が詳しいよ。歌の右側には、

　なにくれといひありきしほどに、仕（つか）まつりし深草（ふかくさ）の帝（みかど）隠れおはしましまして、かはらむ世を見むも、堪（た）へがたくかなし。蔵人の頭の中将などいひて、夜昼馴（な）れ仕まつりて、「名残りなからむ世に交（ま）じらはじ」とて、にはかに、家の人にも知らせで、比叡（ひえ）に上りて、頭（かしら）下ろし侍りて、思ひ侍りしも、さすがに、親などのことは、心にやかかり侍りけむ。

と、歌が詠まれた状況が書かれているよ。

生徒　そこまで分かると、浮舟とのつながりも見えてくる気がします。

教師　それでは、板書しておくから、歌が詠まれた状況も踏まえて、遍昭の和歌と『源氏物語』の浮舟、それぞれについてみんなで意見を出し合ってごらん。

① 生徒Ａ ―― 遍昭は、お仕えしていた帝の死をきっかけに出家したんだね。そのときに「たらちね」、つまりお母さんのことを思って「母はこのように私が出家することを願って私の髪をなでたに違いない」と詠んだんだから、遍昭の親は以前から息子に出家してほしいと思っていたんだね。

② 生徒Ｂ ―― そうかなあ。この和歌は「母は私がこのように出家することを願って私の髪をなでたはずがない」という意味だと思うな。出家をして帝への忠義は果たしたけれど、育ててくれた親に申し訳ないという気持ちもあって、だから『遍昭集』で「さすがに」と言っているんだよ。

③ 生徒Ｃ ―― 私はＡさんの意見がいいと思う。浮舟も出家することで、遍昭と同じくお母さんの意向に沿った生き方をしようとしているんだよ。つまり、今まで親の期待に背いてきた浮舟が、これからの人生をやり直そうとしている決意を、心の中でお母さんに誓っていることになるね。

④ 生徒Ｄ ―― 私も和歌の解釈はＡさんのでいいと思うけど、『源氏物語』に関してはＣさんとは意見が違う。薫か匂宮と結ばれて幸せになりたいというのが、浮舟の本心だったはずだよ。自分も遍昭のように晴れ晴れした気分で出家できたらどんなにいいかという望みが、浮舟の独り言から読み取れるよ。

⑤ 生徒Ｅ ―― いや、和歌の解釈はＢさんのほうが正しいと思うよ。浮舟も元々は気がすすまなかった、親もそれを望んでいない、それでも過去を清算するためには出家以外に道はないとわりきった浮舟の潔さが、遍昭の歌を口ずさんでいるところに表れているんだよ。

⑥ 生徒Ｆ ―― 私もＢさんの解釈のほうがいいと思う。でも、遍昭が出家を遂げた後に詠んだ歌を、浮舟は出家の前に思い起こしているという違いは大きいよ。出家に踏み切るだけの心の整理を、浮舟はまだできていないということが、引き歌によって表現されているんだよ。

第３講 演習問題（古文）

第３問 次の文章は『平家物語』巻第七「忠度都落（ただのりのみやこおち）」の全文である。これを読んで、後の問い（**問１～５**）に答えよ。

薩摩守忠度（さつまのかみただのり）(注1)は、いづくよりや帰られたりけん、侍五騎、童（わらは）一人、わが身共に七騎取（とつ）て返し、五条の三位俊成（さんみしゆんぜい）卿(注2)の宿所におはして見給へば、門戸を閉ぢて開かず。「忠度」と名のり給へば、「落人（おちうと）帰りきたり」とて、その内騒ぎあへり。薩摩守馬（むま）よりおり、みづからたからかにのたまひけるは、「別（べち）の子細候はず。三位殿に申すべきことあつて、忠度が帰りまいつて候ふ。門をひらかれずとも、此（この）きはまで立ちよらせ給へ」とのたまへば、俊成卿、「<u>さる事あるらん。その人ならば苦しかるまじ。</u>(A)入れ申せ」とて、門を開けて対面あり。事の体、何となうあはれなり。

薩摩守のたまひけるは、「年ごろ申し承つて後、おろかならぬ御事に思ひ参らせ候へども、この二、三年は、京都の騒ぎ、国々の乱れ、しかしながら当家の身の上の事

メモ欄

に候ふ間、(ア)粗略を存ぜずといへども、常に参り寄る事も候はず。君(注3)すでに都を出(い)でさせ給ひぬ。一門の運命はや尽き候ひぬ。撰集(せんじう)のあるべきよし承り候ひしかば、生涯の面目に、一首なりとも御恩をかうぶらうど存じて候ひしに、やがて世の乱れ出で来て、その沙汰なく候ふ条、ただ一身の嘆きと存じ候ふ。世静まり候ひなば、勅撰の御沙汰候はんずらん。これに候ふ巻物のうちに、Bさりぬべきもの候はば、一首なりとも御恩をかうぶりて、草の陰にてもうれしと存じ候はば、遠き御守りでこそ候はんずれ」とて、日ごろ読みおかれたる歌どもの中に、秀歌とおぼしきを百余首書き集められたる巻物を、今はとてうつ立たれけるとき、これを取つて持たれたりしが、鎧(よろひ)の引き合はせより取り出でて、俊成卿に奉る。

三位これを開けて見て、「かかる忘れ形見を給はり置き候ひぬる上は、ゆめゆめ粗略を存ずまじう候ふ。御疑ひあるべからず。さてもただ今の御渡りこそ、情けもすぐれて深う、あはれもことに思ひ知られて、感涙おさへがたう候へ」とのたまへば、薩摩守喜びて、「今は西海の波の底に沈まば沈め、山野にかばねをさらさばさらせ。浮

メモ欄

世に思ひ置く事候はず。さらばいとま申して」とて、馬にうち乗り甲（かぶと）の緒を締め、西をさいてぞ歩ませ給ふ。三位後ろをはるかに見送つて立たれたれば、忠度の声とおぼしくて、「前途（注4）程遠し、思ひを雁山（がんさん）の夕べの雲に馳（は）す」と、高らかに口ずさみ給へば、俊成卿いとど名残惜しうおぼえて、涙をおさへてぞ入り給ふ。

その後、世静まつて、千載集を撰ぜられけるに、忠度のありしありさま、言ひ置きし言の葉、今さら思ひ出でてあはれなりければ、かの巻物のうちに、さりぬべき歌、いくらもありけれども、(イ)勅勘の人なれば、名字をばあらはされず、故郷花（こきやうのはな）（注5）といふ題にてよまれたりける歌一首ぞ、読み人しらずと入れられける。

C　さざなみや志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな

その身、朝敵となりにしうへは、(ウ)子細に及ばずといひながら、うらめしかりしことどもなり。

（注）1　薩摩守忠度 ―― 平家の武将。歌人としても有名。
2　五条の三位俊成 ―― 藤原俊成。『千載和歌集』撰者。
3　君 ―― 安徳天皇。平家一門と共に都落ちする。

メモ欄

4　前途程遠し、思ひを雁山の夕べの雲に馳す――『和漢朗詠集』にある送別の句。

5　故郷花――長等(ながら)山に咲いている山桜のこと。

メモ欄

問１　傍線部Ａ「さる事あるらん。その人ならば苦しかるまじ」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［１］。

① 我々が都落ちすることはあるだろう。忠度ならばかまわない。
② 忠度が訪ねてくることはあるだろう。彼ならば差し支えあるまい。
③ 勅撰集に選ばれることはあるだろう。忠度ならばおかしくはない。
④ 勅撰の沙汰はあるだろう。忠度ならば撰者にしてやってもいい。
⑤ 落人をかくまうことはあるだろう。忠度ならば遠慮はいらない。

問２ 傍線部(ア)〜(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①〜⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は [2] 〜 [4]。

(ア) 粗略を存ぜず [2]

① おろそかに思ってはいない。
② いくさの計略については知らない。
③ 粗末な身なりであるにもかかわらず。
④ 無礼かどうかも判断できない。
⑤ ろくなあいさつさえしていない。

(イ) 勅勘 [3]

① 帝の意志。
② 帝の勘違い。
③ 帝のとがめ。
④ 帝の褒美。
⑤ 帝の通知。

(ウ) 子細に及ばず [4]

① 細かいことは分からない。
② ささいな違いは気にしない。
③ 今のところ勝ち目はない。
④ 生きて帰れるとは限らない。
⑤ とやかく言えるものではない。

問３　傍線部Ｂ「さりぬべきもの」とあるが、その意味として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［５］。

① よく手直しすればましになりそうなもの。
② ある程度まではよくできているもの。
③ 傑作と判断して間違いないもの。
④ 勅撰集に載せるにふさわしいもの。
⑤ いかにも初心者の作品らしいもの。

問４　傍線部Ｃ「さざなみや志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな」の歌の説明として**適当でないもの**を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［６］。

① 掛詞（かけことば）が用いられている。

② 枕詞（まくらことば）が用いられている。

③ 文末の「かな」は詠嘆の終助詞である。

④ 忠度が俊成に求められて作った歌ではない。

⑤ 戦乱で荒れ果てた都を詠（よ）んだ歌である。

問５　次に掲げるのは、本文中の和歌に関して、生徒と教師が交わした授業中の会話である。歌の解釈や、この歌が「読み人しらず」として勅撰集に掲載された理由として、会話の後に六人の生徒から出された発言①〜⑥のうち、適当なものを<u>二つ</u>選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は［７］・［８］。

生徒　最後、忠度の歌が「読み人しらず」として勅撰集に掲載されたとありますね。

教師　これは実際に確かめられるよ。『千載和歌集』の春歌の部に「故郷花といへる心をよみ侍りける　読み人しらず」として、まったく同じ歌が載っているんだ。

生徒　『平家物語』を読めば作者が忠度であることはすぐに分かるのに、わざわざ隠すんですね。

教師　作者がはっきりしているのに、あえて「読み人しらず」とすることは珍しくないよ。たとえば『新古今和歌集』に「おのが妻恋ひつつ鳴くや五月闇（さつきやみ）神南備山（かんなびやま）の山郭公（やまほととぎす）」という「読み人しらず」の歌があるが、これの作者は後鳥羽院なんだ。

生徒　後鳥羽院の歌を「読み人しらず」にしたんですか。

教師　ここには本来、山部赤人の「旅にして妻恋すらしほととぎす神奈備山にさ夜ふけて鳴く」という歌が入るはずだった。後で同じ歌が『後撰和歌集』に載っていることが分かって、他の勅撰集と重複させるのは避けたかった。だから後鳥羽院が赤人の歌をもとにこの歌を作って差し替えたんだ。院の名を出さずに「読み人しらず」としたのは、全体の調和を保つためらしいよ。

生徒　『万葉集』にも名前の分からない民衆の歌がたくさん載っているけれど、勅撰集の「読み人しらず」にはいろいろな理由があるんですね。

教師　じゃあ『平家物語』の忠度の歌について、これが「読み人しらず」として扱われた理由も含めて話し合ってごらん。

①　生徒Ａ――これは、戦乱で「志賀の都」を捨てることになった辛さを歌った歌だね。落人になったからといって名前も載せてもらえず「読み人しらず」として扱われた無念が最後の「うらめしかりしこともなり」にこもっているように感じる。

②　生徒Ｂ――『万葉集』で多くの人が作者不明とされているように、『平家物語』が過去のものになるにつれて、忠度の歌も忘れられてしまったんじゃないかな。だから『千載和歌集』にも名前がないんだよ。

③　生徒Ｃ――いや、平家の人々は朝敵になって都から出ていった、いわば罪人でしょう。「読み人しらず」としてでも勅撰集に載せてくれたのは俊成なりの、精一杯の友情のあかしだと思うよ。

④　生徒Ｄ――さっきの先生の話で、全体の調和を考えて後鳥羽院の歌を「読み人しらず」にしたとあったように、上手な歌じゃないから「読み人しらず」にしたんじゃないかな。「志賀の都」なんて源平の合戦とぜんぜん関係ないし。

⑤　生徒Ｅ――それまで仲良くしてくれたのに、都落ちが決まったとたんに門も開けてくれなくなった人々の心変わりを感じて、「桜だけは昔と変わらず迎えてくれる」と慰めを見いだしているんだ。人の心は変わっても自然は昔と変わらないから。

⑥　生徒Ｆ――源平の合戦とは関係なく、古都に咲く桜の姿を歌っているね。春の情景として純粋に美しいから、春歌として掲載されたんだと思う。

第４講 2017年度 試行調査 第５問（漢文）

第５問

次の【文章Ⅰ】は、殷(いん)王朝の末期に、周(しゅう)の西伯(せいはく)が呂尚(りょしょう)（太公望(たいこうぼう)）と出会った時の話を記したものである。授業でこれを学んだＣ組は太公望について調べてみることになった。二班は、太公望のことを詠んだ佐藤一斎(さとういっさい)の漢詩を見つけ、調べたことを【文章Ⅱ】としてまとめた。【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んで、後の問い（問１～７）に答えよ。なお、返り点・送り仮名を省いたところがある。

【文章Ⅰ】

呂尚蓋嘗(1)窮困、年老矣。以漁釣奸(注1)周西伯。A西伯将出猟卜之。曰「所獲非龍、非彲、非虎、非羆、所獲覇王之輔」。於是周西伯猟。果(ア)遇太(注2)公於渭(注3)之陽。与(2)語大説曰「自吾(注4)先君太公曰『当(イ)有聖

メモ欄

人㆒適(ゆク)㆖㆑周ニ。周以テ興ラント。』**B** <u>子ハ真ニ是レナルか邪。</u>吾ガ太公望ムコト㆑子ヲ久シト矣。」故ニ号シテ㆑之ヲ曰フ㆓太公望ト㆒。載セテ与倶ニ帰リ、立テテ為ス㆑師ト。

（司馬遷(しばせん)『史記(しき)』による。）

（注）
1　奸 ―― 知遇を得ることを求める。
2　太公 ―― ここでは呂尚を指す。
3　渭之陽 ―― 渭水(いすい)の北岸。渭水は、今の陝西(せんせい)省を東に流れて黄河に至る川。
4　吾先君太公 ―― ここでは西伯の亡父を指す（なお諸説がある）。

メモ欄

【文章Ⅱ】

佐藤一斎の「太公垂釣の図」について

平成二十九年十一月十三日
愛日楼高等学校二年C組二班

太公垂釣ノ図

佐藤一斎

謬（あやま）リテ被（れ）二文王ニ載セ得テ帰ラ一
一（いつ）竿（かん）ノ風月与レ心違（たが）フ
想（おも）フ君ガ牧（ぼく）野（や）鷹（よう）揚（やう）ノ後
夢ハ在二磻（はん）渓（けい）ノ旧釣（てう）磯（き）ニ一

不本意にも文王によって周に連れていかれてしまい、
釣り竿（ざお）一本だけの風月という願いとは、異なることになってしまった。
想うに、あなたは牧野で武勇知略を示して殷を討伐した後は、
磻渓の昔の釣磯（つりいそ）を毎夜夢に見ていたことであろう。

狩野探幽（かのうたんゆう）画「太公望釣浜図」
日本でも太公望が釣りをする絵画がたくさん描かれました。

幕末の佐藤一斎（一七七二〜一八五九）に、太公望（呂尚）のことを詠んだ漢詩があります。太公望は、七十歳を過ぎてから磻渓（渭水のほとり）で文王（西伯）と出会い、周に仕えます。殷との「牧野の戦い」では、軍師として活躍し、周の天下を盤石のものとしました。しかし、その本当の思いは？

C 佐藤一斎の漢詩は、**【文章Ⅰ】**とは異なる太公望の姿を描きました。

ある説として、この漢詩は佐藤一斎が七十歳を過ぎてから昌平坂（しょうへいざか）学問所（幕府直轄の学校）の教官となり、その時の自分の心境を示しているとも言われています。

〈コラム〉
太公望＝釣り人？
文王との出会いが釣りであったことから、今では釣り人のことを「太公望」と言います。**【文章Ⅰ】**の、西伯が望んだ人物だったからという由来とは違う意味で使われています。

問１　波線部(1)「嘗」・(2)「与」の読み方として最も適当なものを、次の各群の①〜⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は [1]・[2]。

(1)「嘗」 [1]

① かつて
② こころみに
③ すなはち
④ なめて
⑤ なんぞ

(2)「与」 [2]

① あたへ
② あづかり
③ ここに
④ すでに
⑤ ともに

問２ 二重傍線部(ア)「果」・(イ)「当」の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①〜⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 3 ・ 4 。

(ア)「果」 3

① たまたま
② 案の定
③ 思いがけず
④ やっとのことで
⑤ 約束どおりに

(イ)「当」 4

① ぜひとも〜すべきだ
② ちょうど〜のようだ
③ どうして〜しないのか
④ きっと〜だろう
⑤ ただ〜だけだ

問３　傍線部**Ａ**「西　伯　将　出　猟　卜　之」の返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **5** 。

① 西　伯　将㆓出㆑猟　卜㆒㆑之　　西伯将に猟(か)りに出(い)でて之を卜(うらな)ふべし

② 西　伯　将　出　猟　卜㆑之　　西伯の将出でて猟りして之を卜ふ

③ 西　伯　将　出㆑猟　卜㆑之　　西伯将(は)た猟りに出でて之を卜ふか

④ 西　伯　将㆑出㆑猟　卜㆑之　　西伯猟りに出づるを将(ひき)ゐて之を卜ふ

⑤ 西　伯　将㆓出　猟㆒卜㆑之　　西伯将に出でて猟りせんとし之を卜ふ

問４　傍線部B「子 真 是 邪」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6 。

① 我が子はまさにこれにちがいない。
② あなたはまさにその人だろうか、いや、そんなはずはない。
③ あなたはまさにその人ではないか。
④ 我が子がまさにその人だろうか、いや、そんなはずはない。
⑤ 我が子がまさにその人ではないか。

問５　**【文章Ⅱ】**に挙げられた佐藤一斎の漢詩に関連した説明として正しいものを、次の①～⑥のうちから、**すべて**選べ。解答番号は［７］。

① この詩は七言絶句という形式であり、第一、二、四句の末字で押韻している。
② この詩は七言律詩という形式であり、第一句と偶数句末で押韻し、また対句を構成している。
③ この詩は古体詩の七言詩であり、首聯（しゅれん）、頷聯（がんれん）、頸聯（けいれん）、尾聯（びれん）からなっている。
④ この詩のような作品は中国語の訓練を積んだごく一部の知識人しか作ることができず、漢詩は日本人の創作活動の一つにはならなかった。
⑤ この詩のような作品を詠むことができたのは、漢詩を日本独自の文学様式に変化させたからで、日本人は江戸時代末期から漢詩を作るようになった。
⑥ この詩のように優れた作品を日本人が多く残しているのは、古くから日本人が漢詩文に親しみ、自らの教養の基礎としてきたからである。

問６　【文章Ⅱ】の□で囲まれた〈コラム〉の文中に一箇所誤った箇所がある。その**誤った箇所**を次の**Ａ群**の①〜③のうちから一つ選び、**正しく改めたもの**を後の**Ｂ群**の①〜⑥のうちから一つ選べ。解答番号は［８］・［９］。

Ａ群　［８］

① 文王との出会いが釣りであった
② 釣り人のことを「太公望」と言います
③ 西伯が望んだ人物だったから

Ｂ群　［９］

① 文王が卜（うらな）いをしている時に出会った
② 文王が釣りをしている時に出会った
③ 釣りによって出世しようとする人のことを「太公望」と言います
④ 釣り場で出会った友のことを「太公望」と言います
⑤ 西伯の先君太公が望んだ人物だったから
⑥ 西伯の先君太公が望んだ子孫だったから

問７ 【**文章Ⅱ**】の傍線部Ｃ「佐藤一斎の漢詩は、【**文章Ⅰ**】とは異なる太公望の姿を描きました。」とあるが、佐藤一斎の漢詩からうかがえる太公望の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 10 。

① 第一句「謬りて」は、文王のために十分に活躍することはできなかったという太公望の控えめな態度を表現している。
② 第一句「謬りて」は、文王の補佐役になって殷を討伐した後の太公望のむなしさを表現している。
③ 第二句「心と違ふ」は、文王に見いだされなければ、このまま釣りをするだけの生活で終わってしまっていたという太公望の回想を表現している。
④ 第二句「心と違ふ」は、殷の勢威に対抗するために文王の補佐役となったが、その後の待遇に対する太公望の不満を表現している。
⑤ 第四句「夢」は、本来は釣磯で釣りを楽しんでいたかったという太公望の望みを表現している。
⑥ 第四句「夢」は、文王の覇業が成就した今、かなうことなら故郷の磻渓の領主になりたいという太公望の願いを表現している。

第5講 2018年度 試行調査 第5問（漢文）

第5問

次の【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】は、いずれも「狙公（そこう）」（猿飼いの親方）と「狙（そ）」（猿）とのやりとりを描いたものである。【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んで、後の問い（問1〜5）に答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。（配点 50）

【文章Ⅰ】

猿飼いの親方が芧（とち）の実を分け与えるのに、「朝三つにして夕方四つにしよう、」といったところ、猿どもはみな怒った。「それでは朝四つにして夕方三つにしよう、」といったところ、猿どもはみな悦（よろこ）んだという。

（金谷（かなや）治（おさむ）訳注『荘子』による。）

【文章Ⅱ】

楚（注1）ニ有リ二養ヒテレ狙（そ）ヲ以テ為スレ生（1）者一。楚人謂フ二之ヲ

狙（そ）公（こう）ト一。旦（注2）日必ズ部（注3）二‐分シテ衆狙ヲ于庭ニ一、使（A）老

狙率以之山中、求草木之実。賦（注4）シテ二什（じふ）ノ

メモ欄

一以自(注5)奉。或不給、則加鞭(注6)箠焉。群狙皆畏苦之、弗敢違也。一日、有小狙謂衆狙曰、「B山之果、公所樹与。」曰、「否也。天生也。」曰、「非公不得而取与。」曰、「否也。皆得而取也。」曰、「然則吾何仮於彼而為之役乎。」言未既、衆狙皆寤。其夕、相与伺狙公之寝、破柵毀柙、取其積、(2)相携而入于林中、不復帰。狙公卒餒而死。

郁(注7)離子曰、「世有以術使民而無

メモ欄

道（注8）揆一者、上其レ如キ二狙公ノ一乎。C惟其昏而未レ覚也。一旦有レラバ開レクコト之ヲ、其ノ術窮セント矣。」

（劉基（りゅうき）『郁離子』による。）

（注）
1　楚――古代中国の国名の一つ。
2　旦日――明け方。
3　部分――グループごとに分ける。
4　賦二什一一――十分の一を徴収する。
5　自奉――自らの暮らしをまかなう。
6　鞭箠――むち。
7　郁離子――著者劉基の自称。
8　道揆――道理にかなった決まり。

メモ欄

問１ 傍線部(1)「生」・(2)「積」の意味として最も適当なものを、次の各群の①〜⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は［1］・［2］。

(1)「生」［1］
① 往生
② 生計
③ 生成
④ 畜生
⑤ 発生

(2)「積」［2］
① 積極
② 積年
③ 積分
④ 蓄積
⑤ 容積

問２　傍線部A「使老狙率以之山中、求草木之実」の返り点・送り仮名の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **3** 。

① 使ム下老狙ヲシテ率キテ以テ之キ二山中ニ一、求メ中草木之実ヲ上
老狙をして率(ひき)ゐて以て山中に之(ゆ)き、草木の実を求めしむ

② 使ヒテ二老狙ヲ一率ネ以テ之カシメ二山中ニ一、求ム二草木之実ヲ一
老狙を使ひて率(おほむ)ね以て山中に之かしめ、草木の実を求む

③ 使メテ二老狙ヲシテ率ヘ一以テ之キ二山中ニ一、求ム二草木之実ヲ一
老狙をして率(とら)へしめて以て山中に之き、草木の実を求む

④ 使シ老狙率キテ以テ之カバ二山中ニ一、求ム二草木之実ヲ一
使(も)し老狙率(ひき)ゐて以て山中に之かば、草木の実を求む

⑤ 使ム下老狙ヲバ率ヘテ以テ之キ二山中ニ一、求メ中草木之実ヲ上
老狙をば率(とら)へて以て山中に之き、草木の実を求めしむ

問３ 傍線部Ｂ「山之果、公所樹与」の書き下し文とその解釈との組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は **4** 。

① 山の果は、公の樹(う)うる所か
山の木の実は、猿飼いの親方が植えたものか

② 山の果は、公の所の樹(き)か
山の木の実は、猿飼いの親方の土地の木に生(な)ったのか

③ 山の果は、公の樹(う)ゑて与ふる所か
山の木の実は、猿飼いの親方が植えて分け与えているものなのか

④ 山の果は、公の所に樹(う)うるか
山の木の実は、猿飼いの親方の土地に植えたものか

⑤ 山の果は、公の樹(う)うる所を与ふるか
山の木の実は、猿飼いの親方が植えたものを分け与えたのか

問４ 傍線部Ｃ「惟 其 昏 而 未レ 覚 也」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［ 5 ］。

① ただ民たちが疎くてこれまで気付かなかっただけである
② ただ民たちがそれまでのやり方に満足していただけである
③ ただ猿たちがそれまでのやり方に満足しなかっただけである
④ ただ猿飼いの親方がそれまでのやり方のままにしただけである
⑤ ただ猿飼いの親方が疎くて事態の変化にまだ気付いていなかっただけである

問５　次に掲げるのは、授業の中で【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】について話し合った生徒の会話である。これを読んで、後の(i)～(iii)の問いに答えよ。

生徒A　【文章Ⅰ】のエピソードは、有名な故事成語になっているね。
生徒B　それって何だったかな。［X］というような意味になるんだっけ。
生徒C　そうそう。もう一つの【文章Ⅱ】では、猿飼いの親方は散々な目に遭っているね。【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】とでは、何が違ったんだろう。
生徒A　【文章Ⅰ】では、猿飼いの親方は言葉で猿を操っているね。
生徒B　【文章Ⅱ】では、猿飼いの親方はむちで猿を従わせているよ。
生徒C　【文章Ⅰ】では、猿飼いの親方の言葉に猿が丸め込まれてしまうけど……。
生徒A　【文章Ⅱ】では、［Y］が運命の分かれ目だよね。これで猿飼いの親方と猿との関係が変わってしまった。
生徒B　【文章Ⅱ】の最後で郁離子は、［Z］と言っているよね。
生徒C　だからこそ、【文章Ⅱ】の猿飼いの親方は、「其の術窮せん。」ということになったわけか。

(i)　［X］に入る有名な故事成語の意味として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［6］。

①　おおよそ同じだが細かな違いがあること
②　朝に命令を下し、その日の夕方になるとそれを改めること
③　二つの物事がくい違って、話のつじつまが合わないこと
④　朝に指摘された過ちを夕方には改めること
⑤　内容を改めないで口先だけでごまかすこと

(ii) [Y] に入る最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。解答番号は [7] 。

① 猿飼いの親方がむちを打って猿をおどすようになったこと
② 猿飼いの親方が草木の実をすべて取るようになったこと
③ 小猿が猿たちに素朴な問いを投げかけたこと
④ 老猿が小猿に猿飼いの親方の素性を教えたこと
⑤ 老猿の指示で猿たちが林の中に逃げてしまったこと

(iii) [Z] に入る最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。解答番号は [8] 。

① 世の中には「術」によって民を使うばかりで、「道揆」に合うかを考えない猿飼いの親方のような者がいる
② 世の中には「術」をころころ変えて民を使い、「道揆」に沿わない猿飼いの親方のような者がいる
③ 世の中には「術」をめぐらせて民を使い、「道揆」を知らない民に反抗される猿飼いの親方のような者がいる
④ 世の中には「術」によって民を使おうとして、賞罰が「道揆」に合わない猿飼いの親方のような者がいる
⑤ 世の中には「術」で民をきびしく使い、民から「道揆」よりも多くをむさぼる猿飼いの親方のような者がいる

第６講　演習問題（漢文）

第４問　次の【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】は、いずれも有名な故事成語の出典となった漢文である。これを読んで、後の問い（問１～５）に答えよ。なお、返り点・送り仮名を省いたところがある。

【文章Ⅰ】『韓非子（かんぴし）』

宋人ニ有リ二耕スレ田ヲ者一。田中ニ有リレ株。兎（うさぎ）走リテ触レレ株ニ、(1)折リテレ頸（くび）ヲ而死ス。因リテ釈（す）テテ二其ノ耒（注1）（すき）ヲ一而守リレ株ヲ、冀（こひねが）フ二復（ま）タ得ムトレ兎ヲ一。Ａ兎不可復得、而身為宋国笑。Ｂ今欲以先王之政、治当世之民、皆守株之類也。

【文章Ⅱ】『呂氏春秋（りょししゅんじゅう）』

楚人ニ有リ二渉（わた）ルレ江（注2）ヲ者一。其ノ剣自リ二舟中一墜（お）ツ二於水一ニ。

メモ欄

遽刻其舟曰、是吾剣之所従墜也。舟止。従其所契者、入水求之。舟已行矣、而剣不行。C 求剣若此、不亦惑乎。以故 (2) 法為其国与此同。時已徙矣、而法不徙。以此為治、豈不難哉。

（注）１ 耒――鋤。
２ 江――揚子江。

メモ欄

問１　二重傍線部⑴「折」・⑵「故」の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は［1］・［2］。

⑴「折」［1］
① 折衝
② 折半
③ 挫折
④ 骨折
⑤ 夭折

⑵「故」［2］
① 物故
② 故事
③ 故障
④ 事故
⑤ 故意

問２　傍線部**Ａ**「兎 不 可 復 得、而 身 為 宋 国 笑」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 3 。

① 兎は二度と手に入らず、その人は宋の国の人の笑いものになった
② 兎を手に入れることはできたため、宋の国の人は笑わなかった
③ 兎が手に入ることはなかったと、宋の国の人に笑って説明した
④ 兎が手に入ると宋の国の人はみなその真似をして、他国から笑われた
⑤ 兎がそんな方法で手に入るものかと、宋の国の人は笑って信じなかった

問３ 傍線部B「今欲以先王之政、治当世之民、皆守株之類也」の返り点・送り仮名の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 4 。

① 今 欲（スルニ） 以（テ）二 先 王 之 政（ヲ）一、 治（ムルハ）下 当 世 之 民（ヲ）上、 皆 守（ル）レ 株（ヲ） 之 類 也
今欲するに先王の政（まつりごと）を以て、当世の民を治むるは、皆株を守るの類なり

② 今 欲（スル）下 以（テ） 先 王 之 政（トシ）、 治（メテ）二 当 世（ヲ）一 之（クハ）レ 民（トトモニ）、 皆 守（ルノ）レ 株（ヲ） 之（レ）レ 類（ヲ）上 也
今以て先王の政とし、当世を治めて民とともに之くは、皆之れ株を守るの類を欲するなり

③ 今 欲（スルハ）下 以（テ）二 先 王 之 政（ヲ）一、 治（メント）中 当 世 之 民（ヲ）上、 皆 守（ル）レ 株（ヲ） 之 類 也
今先王の政を以て、当世の民を治めんと欲するは、皆株を守るの類なり

④ 今 欲（シ）二 以（テ） 先 王 之 政（ヲ）一、 治（メテ） 当（ニ）（クハ）下 世 之 民（トス）上、 皆 守（レル） 株 之 類 也
今以て先王の政を欲し、治めて当に世の民とすべくは、皆守れる株の類なり

⑤ 今 欲（スル）下 以（テ）二 先 王 之 政（ヲ）一、 治（メザラント）中 当 世 之 民（ヲ）上、 皆 守（ルニ）レ 株（ヲ） 之（レ）レ 類（フ） 也
今先王の政を以て、当世の民を治めざらんと欲する、皆株を守るに之れ類（たぐ）ふなり

問４　傍線部C「求 剣 若 此、不 亦 惑 乎」の書き下し文とその解釈との組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。
解答番号は **5** 。

① 剣を求めて此くも若きは、亦た惑はざるや
　これほど若い者が剣を求めても、また間違わずにいられようか

② 求むる剣は此くも若し、亦た惑はんや
　探していた剣がこれほど未熟だと、間違ったりしないだろうか

③ 此くの若く剣を求む、亦た惑はざるべし
　このように剣を探すなら、どうして間違うだろうか

④ 剣を求むること此くの若きは、亦た惑ひならずや
　こんな方法で剣を探すのは、なんと間違ったことではないか

⑤ 此くの若き剣、亦た惑はずに求めんや
　このような剣を、再び間違えずに探せるだろうか

問５　次に掲げるのは、授業の中で【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】について話し合った生徒の会話である。これを読んで、後のⅰ〜ⅲの問いに答えよ。

生徒Ａ　【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】は故事成語の出典になっている話だね。
生徒Ｂ　ほかにも【文章Ⅰ】は「逆鱗（げきりん）」や「矛盾」の出典として有名だよ。
生徒Ｃ　【文章Ⅰ】はひたすら株を守り続けた宋の国の人の行為が書かれているね。
生徒Ａ　一方、【文章Ⅱ】は「 X 」という楚の国の人の行為が中心になっている。
生徒Ｂ　【文章Ⅰ】は一度得た幸運を再び期待するという虫のいい話だね。一方の【文章Ⅱ】は幸運とは関係ない失敗話だけど……。
生徒Ｃ　どちらも故事成語としては「 Y 」という似たような意味で用いられているのが面白いな。
生徒Ａ　【文章Ⅰ】は「今欲以先王之政、治当世之民、皆守株之類也」という言葉で締められているよ。
生徒Ｂ　【文章Ⅱ】の締めくくりは「時已徙矣、而法不徙。以此為治、豈不難哉」となっている。
生徒Ｃ　この文章の大意は「 Z 」というところだね。

（ⅰ）　X に入る最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6 。

① 川を舟で渡る
② 大事な剣を水に落とす
③ 舟に刻み目をつけて剣を探す
④ 舟を止めさせる
⑤ 自分で水に潜る

(ii) Y に入る最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7 。

① 発想が飛躍しすぎて誰もついてこられないこと
② 後先を考えずに危険な行動をすること
③ 成果が得られるまで非常に時間がかかること
④ 幸運を得るために無駄な努力をすること
⑤ 古いやり方にこだわって融通がきかないこと

(iii) Z に入る最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8 。

① どんなに急いでも法はすぐに変わらない。こんな状態で国を治めるのは、難しいに決まっている
② 時代は変化しているのに法はもとのままだ。こんな状態で国を治めるのは、なんと難しいことではないか
③ 時代が移り変わっても法の精神は不変だ。これをふまえて国を治めるのは、決して難しくないはずだ
④ 時代が変われば法もころころ変わる。こんな状態で国を治めるのは、難しいと言わざるをえない
⑤ 時代は変わらず安定し法も変わらない。それを保ってさえいれば、どうして国を治めるのに難しいことがあろうか

■ 2017年度 試行調査

問題番号	設　問	解答番号	正　解
第４問	1	1	1
	2	2	4
	3	3	1
	4	4	5
	5	5	3
	6	6	3

第１講　２０１７年度 試行調査 第４問（古文）　解答

■現代語訳

【文章Ⅰ】

あの（桐壺の更衣の母からの）贈り物を（帝に）ご覧に入れる。（玄宗皇帝が道士に命じ、道士が）亡き人〔＝楊貴妃〕のすみかを探し出したとかいう、証拠のかんざしであったなら（どんなにうれしいだろう）、と（帝は）お思いになるが、まったくかいのないことだ。

尋ねゆく……＝（桐壺の更衣の魂を）尋ねて行く幻術士がいればなあ。人づてにでも魂のありかをそこと知ることができるように。

絵に描かれている楊貴妃の容貌は、すぐれた絵師といっても、筆の力に限りがあったので、たいそう美しさが少ない。太液という池に咲いている蓮の花と、未央という宮殿に植えられている柳も、本当に（それに）似通った（楊貴妃の）容貌を（思うと）、中国風の装いは端正であっただろうが、（桐壺の更衣は）心がひかれてかわいらしかったことを（帝は）思い出しなさると、花や鳥の色にも声にも、たとえようがない。

【文章Ⅱ】

あの（桐壺の更衣の母からの）贈り物を（帝に）ご覧に入れる。（玄宗皇帝が道士に命じ、道士が）亡き人〔＝楊貴妃〕のすみかを探し出したとかいう、証拠のかんざしであったなら（どんなにうれしいだろう）、と（帝は）お思いになるが、大変悲しい。

尋ねゆく……＝（桐壺の更衣の魂を）尋ねて行く幻術士がいればなあ。人づてにでも魂のありかをそこと知ることができるように。

絵に描かれている楊貴妃の容貌は、すぐれた絵師といっても、筆の力に限りがあったので、たいそう美しさが少ない。太液という池に咲いている蓮の花も、本当に（それに）似通った（楊貴妃の）容貌・顔色と、中国風にしていたような装いは端正で、美しかっただろうが、（桐壺の更衣の）心がひかれてかわいらしかった様子は、女郎花が風になびいているよりもしなやかで、撫子が露に濡れているのよりもかわいらしく、（帝は）心ひかれた容貌・様子を思い出しなさると、花や鳥の色にも声にも、たとえようがない。

【文章Ⅲ】

亡き父の光行が、昔、五条三品〔＝藤原俊成〕にこの物語〔＝『源氏物語』〕の不審の所々を尋ね申し上げました中に、当巻〔＝桐壺の巻〕に、「絵に描かれている楊貴妃の容貌は、すぐれた絵師といっても、筆の力に限りがあるので、美しさが少ない。太液の芙蓉、未央の柳も」と書いて、「未央の柳」という一句を見せ消ち〔＝文字が読めるように文字の上に線を引くこと〕にした。これによって（父光行は）親行〔＝筆者〕を使いにして、

「楊貴妃を芙蓉と柳とにたとえ、更衣〔＝桐壺の更衣〕を女郎花と撫子にたとえる。みな二句ずつでよく理解できますのを、（俊成卿の）御本で、未央の柳を消されたのは、どのような理由があるのでしょうか」

と申し上げたところ、（俊成卿が）

「私はどうして勝手なことをするだろうか、いや、勝手なことなどするわけがない。藤原行成卿の自筆の本で、この一句を見せ消ちになさった。（行成卿は）紫式部と同時代の人ですので、申し合わせるようなこともあるでしょう、といってこれも墨をつけて（消して）はいますが、不審に思い何度も見たところ、若菜の巻で（その理由を）理解して、おもしろくみなしているのです」

と申し上げなさったのを、私親行が、（父に）このことを語ると、（父が）

「若菜の巻には、どこに同類がありますと（俊成卿は）申し上げなさったのか」

と言うので、

「そこまでは尋ね申し上げない」

と答えましたのを、（父が）さまざまにはずかしめ叱りましたので、私親行は（家に）こもって、若菜の巻を数回開き見ると、（俊成卿が言った）その意を理解した。六条院の女試楽〔＝光源氏が邸宅で開催した女性たちによる演奏会〕で、女三の宮が、他の人より小柄でかわいらしげで、ただ御衣だけがあるような心地がする（のが）、美しさの点では劣っているが、とても気品がありかわいらしくて、二月の二十日ごろの青柳が枝をたらしはじめたような様子で、とある。柳を人の顔にたとえていることが多くなることによって、（かえって俊成卿は桐壺の巻の「未央の柳」を）見せ消ちになさいましたのだ。三品〔＝俊成卿〕の和才〔＝和歌や和文に関する才能〕がすぐれた中にこの物語〔＝『源氏物語』〕の奥義ま

でも極められましたのは、すばらしいことである。そうであるのに、（俊成の息子である）京極中納言入道〔＝藤原定家〕の家の本に「未央の柳」と書かれていることもあるのでしょうか。また俊成卿の女（むすめ）に（定家の「未央の柳」のことを）尋ね申し上げましたところ、（俊成卿の女は）「このことは代々の書写の誤りで書き入れられたのだろうか、あまりに対句のようにしてみにくい感じにした人がいるのでしょうか」と云々。よって私の本〔＝源光行・親行親子が整えた本文〕ではこれ〔＝未央の柳〕を用いない。

第2講　2018年度 試行調査 第4問（古文） 解答

■ 2018年度 試行調査

問題番号（配点）	設　問	解答番号	正　解	配　点
第４問（50）	1	1	4	7
	2	2	3	5
		3	1	5
		4	2	5
	3	5	3	7
	4	6	5	7
	5	7－8	2－6	14(各7)

（注）
－（ハイフン）でつながれた正解は，順序を問わない。

■現代語訳

（浮舟は）あきれたことに失敗した我が身を思い続けてゆくと、匂宮を、少しでも愛しいと思い申し上げたというような心がたいそう道理にはずれている、ただ、この人〔＝匂宮〕とのご縁でさまよい歩いたと思うと、匂宮に連れ出されて宇治川のほとりの小屋で二人きりで過ごしたことを、どうして魅力的であると思い申し上げたのだろうかとひどくいやになったという気持ちがする。はじめから、（愛情が）浅いながらも穏やかでいらっしゃった人〔＝薫〕は、このときはあのときはなどと、思い出すことは格別にすぐれていた。（私が）このように生きていたと（薫に）聞きつけられ申し上げるような恥ずかしさは、（他の）人よりもきっと勝るだろう。そうはいってもやはり、この世では、（薫の）昔のままのお姿を、遠くからでさえ、いつ見るだろうかと思うが、やはり悪い心だなあ、このようなことだけでも思わないようにしよう、などと心ひとつで思い直している。

ようやく鶏が鳴くのを（浮舟は）聞いて、とてもうれしい。母上のお声を聞いたならば、ましてどうだろう〔＝どれほどうれしいだろう〕と思いながら夜を明かして、気分もとても悪い。供として来るはずの人〔＝浮舟の世話をしている女童〕もすぐには来ないので、そのまま横になっていらっしゃると、いびきの人〔＝浮舟が身を寄せている小野の庵に住む年老いた尼〕はとても早く起きて、粥などの煩わしいことなどを大切に扱って、「あなたにおかれても、はやくお食べなさい」などと寄ってきて言うけれど、（浮舟は）給仕もたいそう気にくわなく、嫌で見知っていない気持ちがして、「気分が悪くて」と、それとなく断りなさるのを、強いて（食べるように）言うのもたいそう気が利かない。いかにも身分が低そうな法師たちなどがたくさん来て、「僧都は、今日（比叡山から）下りなさるはずだ」（と言うので）、「どうして急に」と問う様子なので、（法師たちは）「一品の宮が御物の怪に患っていらっしゃったが、山の座主が御修法を勤め申し上げなさるけれど、やはり僧都が参上なさらないのでは効果がないと言って、昨日再度お召しがありました。右大臣殿の四位少将が、昨晩に夜が更けてから（僧都がいる山に）登っていらっしゃって、后の宮のお手紙などがありましたので（僧都は山を）下りなさるのだ」などと、たいそう盛んに言い立てる。（浮舟は）恥ずかしくとも、（僧都に）会って、尼になさってくださいと言おう、口出しする人が少なくてよい機会だと思うので、起きて、「気分がただもうたいそう悪くございますので、僧都が（山を）下りなさったようなときに、戒律を授けてもらいたいと思いますので、そのように申し上げなさ

いませ」と相談なさると、（老尼は）ぼんやりとうなずく。

（浮舟は）ふだん過ごしている部屋にいらっしゃって、髪は（いつもは）尼君〔＝僧都の妹〕だけが櫛でときなさるのを、他の人に手を触れさせるようなことも嫌に思われるので、自分の手で（やろうとしても）、それでもやはり、できないことであるので、ただ少しとき下ろして、親にもう一度（出家前の）このままの（髪が長い）姿を見せないままにきっとなるだろうことが、自分の意志ですることだがとても悲しい。たいそう思い煩いをしたからであろうか、髪も少し抜け落ちて細くなった気がするけれど、どれほども衰えず、（髪の量は）とても多くて、六尺くらいある髪のすそなどが美しかった。毛筋なども、とても細かく美しい様子である。「このようであれと思って」と独り言を言って座っていらっしゃった。

■ 演習問題

問題番号	設　問	解答番号	正　解
第３問	1	1	2
	2	2	1
		3	3
		4	5
	3	5	4
	4	6	5
	5	7 ー 8	3 ー 6

（注）
ー（ハイフン）でつながれた正解は，順序を問わない。

■現代語訳

薩摩守忠度は、どこから帰られたのであろうか、侍五騎、童一人、自分自身とあわせて七騎で（都に）引き返し、五条の三位俊成卿〔＝藤原俊成〕の屋敷にいらっしゃってご覧になると、門は閉じていて開かない。「忠度」と名乗りなさると、「落人が帰って来た」と言って、その内側では騒ぎ合っている。薩摩守は馬から降りて、自ら高らかにおっしゃるには、「特別なわけはございません。三位殿〔＝俊成〕に申し上げることがあって、忠度が帰ってまいりました。門を開かれなくとも、この近くまで立ち寄りなさいませ」とおっしゃると、俊成卿は、「そうするわけもあるのだろう〔＝忠度が訪ねてくることはあるだろう〕。その人〔＝彼〕ならば差し支えあるまい。入れ申し上げよ」と言って、門を開けて対面した。その様子は、すべてにわたってしみじみとした感じである。

薩摩守がおっしゃるには、「長年（和歌を）教えていただいて以来、（和歌のことは）おろそかに思い申し上げることはありませんが、この二、三年は、京都での騒ぎや、国々の乱れがあり、すべて当家〔＝平家〕の身の上のことですので、（和歌を）おろそかに思ってはいないのですが、いつも（あなたのところに）参上することもございません。君〔＝安徳天皇〕はすでに都を出発なさった。平家一門の運命は、もはや尽きました。勅撰集の編纂があるだろうことを伺いましたので、生涯の名誉に、一首だけでもご恩を被って入れていただこうと思っておりましたが、すぐに乱れが起こって、その〔＝勅撰集の〕ご沙汰もなくなってしまったことは、（私にとって）ただただ大きな嘆きと思っております。世が鎮まりましたならば、勅撰集のご命令がございましょう。ここにございます巻物の中に、（勅撰集に載せるに）ふさわしいものがございましたならば、一首であってもご恩を被って（入れていただいて）、草葉の陰〔＝死後〕でも嬉しいと思いましたら、遠いあの世から（あなたを）お守りしましょう」と言って、これまで詠みおきなさった歌の中で、秀歌と思われるものを百余首書き集められた巻物を、今は（もうこれまで）と出発なさったとき、これを手に取って持っていたが、鎧の合わせ目から取り出して、俊成卿に差し上げる。

三位〔＝俊成〕はこれを開けてみて、「このような忘れ形見をいただきました以上は、決して粗略にはいたしません。お疑いなさいませんように。それにしてもただ今のご来訪は、風情も非常に深く、哀れもしみじみと感ぜられて、感涙を抑えきれません」とおっしゃると、薩摩守は喜んで、「今は西国の海の波の底に沈むのなら沈んでもよい、山野に屍を晒すなら晒してもよい。この世に思いを残すことはございません。

それでは、お別れを申し上げまして（参ります）」と言って、馬に乗って兜の緒を締めて、西を目指して（馬を）歩ませなさる。三位〔＝俊成〕は（忠度の）後姿をはるかに見送って立たれていると、忠度と思われる声がして、「前途程遠し、思ひを雁山の夕べの雲に馳す〔＝これからの旅路は遠い、雁山の夕方の雲に思いを馳せる〕」と、高らかに口ずさまれたので、俊成卿はますます名残惜しく思われて、涙を抑えながら（屋敷の中に）入りなさる。

その後、世が鎮まって、（俊成卿が）『千載集』を編纂されたときに、忠度の生前の様子や、言い残した言葉が、今さらになって思い出されてしみじみと感じたので、あの巻物の中に、ふさわしい歌は、いくらもあったけれども、帝のとがめを受けた人であるので、名字を明らかにされず、「故郷の花」という題で詠まれた歌一首を、「読み人しらず」として入れられた。

　さざなみや……＝志賀の都は荒れてしまったが、昔のままの長等山の山桜よ

その身〔＝忠度〕が、朝敵となってしまった以上は、とやかく言えるものではないと言うけれど、残念だったことである。

■ 2017年度 試行調査

<table>
<tr><th>問題番号</th><th>設　問</th><th>解答番号</th><th>正　解</th><th>備　考</th></tr>
<tr><td rowspan="10">第５問</td><td rowspan="2">1</td><td>1</td><td>1</td><td></td></tr>
<tr><td>2</td><td>5</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="2">2</td><td>3</td><td>2</td><td></td></tr>
<tr><td>4</td><td>4</td><td></td></tr>
<tr><td>3</td><td>5</td><td>5</td><td></td></tr>
<tr><td>4</td><td>6</td><td>3</td><td></td></tr>
<tr><td>5</td><td>7</td><td>1, 6</td><td>＊1</td></tr>
<tr><td rowspan="2">6</td><td>8</td><td>3</td><td rowspan="2">＊2</td></tr>
<tr><td>9</td><td>5</td></tr>
<tr><td>7</td><td>10</td><td>5</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="5">（注）
＊1は，過不足なくマークしている場合のみ正解とする。
＊2は，両方を正しくマークしている場合のみ正解とする。</td></tr>
</table>

■現代語訳

【文章Ⅰ】

呂尚〔＝太公望〕は思うに以前（生活に）困窮し、年老いていた。魚釣りをしていて周の西伯に知遇を得ることを求めた。西伯は狩りに出ようとしてその成果を占った。（占いに）出たのは、「獲物は龍ではなく、雨竜〔＝伝説上の竜、雌の竜などの説がある〕ではなく、虎ではなく、ヒグマでもなく、獲物は覇王の補佐（となる人物）である」と。そこで周の西伯は狩りをした。案の定（西伯は）呂尚に渭水の北岸で出会った。ともに語って（西伯は）大いに喜んで言うには、「私の先君太公〔＝西伯の亡父〕から、『聖人がいてきっと周に行くだろう。周はそれにより強力になるだろう』と言われている。あなたはまさにその人ではないか。私の（亡父）太公があなたを望むことは昔からだ」と。よって呂尚を称して太公望と言う。（西伯は）車に（太公望を）乗せてともに帰り、（太公望を）取り立てて軍師とした。

■ 2018年度 試行調査

問題番号(配点)	設　問	解答番号	正　解	配　点
第５問 (50)	1	1	2	4
		2	4	4
	2	3	1	7
	3	4	1	7
	4	5	1	7
	5	6	5	7
		7	3	7
		8	1	7

■現代語訳

楚の国に猿を飼って生計を立てている者がいた。楚の人はこの者を狙公といった。明け方に必ず大勢の猿を庭でグループごとに分けて、老猿に率いさせて山の中に行かせ、草木の実を求めさせた。十分の一を徴収して自らの暮らしをまかなっていた。あるときはもし供出しないと、むちで打った。猿の群れは皆恐れてこれに苦しんでいたが、決して逆らわなかった。ある日、小猿が猿の群れに言うには、「山の木の実は、猿飼いの親方（＝狙公）が植えたものか」と。（猿たちが）言うには、「そうではない。天が与えたのだ」と。（小猿が）言うには、「親方でなければ手に入れることはできないのか」と。（猿たちが）言うには、「そうではない。誰でも手に入れることができるのだ」と。（小猿が）言うには、「そうならば我々はどうして彼に（木の実を）借り受けて彼のために木の実を取る役をしているのか」と。（小猿の）言葉がまだ終わらないうちに、猿たちは皆気づいた。その夕方、（猿たちは）ともに狙公が寝るのを見はからい、柵を破り檻（おり）を壊して、狙公の蓄えた木の実を取り、皆で持って林の中に入り、二度と帰らなかった。狙公はとうとう飢えて死んだ。

郁離子〔＝筆者〕が言うには、「世に策略で民を使って道理にかなった決まりがない者は、ちょうど狙公のようなものであろうか。ただ民たちが疎くてこれまで気付かなかっただけである。いったん理解することがあれば、その策略は行き詰まってしまうだろう」と。

■ 演習問題

問題番号	設　問	解答番号	正　解
第４問	1	1	4
		2	2
	2	3	1
	3	4	3
	4	5	4
	5	6	3
		7	5
		8	2

■現代語訳

【文章Ⅰ】

宋の国の人に田を耕す者がいた。田に切り株があった。兎が走ってきて切り株にぶつかり、頸の骨を折って死んだ。そこで男は鋤を捨てて切り株を見守り、また兎を得ようと待ち望んだ。兎は二度と手に入らず、その人は宋の国の人の笑いものになった。今、古代聖王の政道を持ち出して、現代の民を治めようとするのは、みな切り株を見守る男の類である。

【文章Ⅱ】

楚の国の人に揚子江を渡る者がいた。その剣が舟から河の中に落ちた。あわててその舟に刻み目をつけて言うには、「ここが私の剣が落ちた所だ」と。舟が止まった。その刻み目をつけた所から、河に飛び込んでこれ〔＝剣〕を探した。舟はすでに進んでいるが、剣は進まない〔＝落ちた所のまま〕。こんな方法で剣を探すのは、なんと間違ったことではないか。昔の方法で国を治めようとするのはこれと同じだ。時代はすでに変わっているが、法律はもとのまま。こんな状態で（国を）治めるのは、なんと難しいことではないか。